

平成21年度 兵庫県立小野高等学校 学校評価報告書

小野高校 学校評価報告書1

重点目標: 学力の向上による進路保障		自己評価 (A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)				学校関係者評価	
年度努力事項と具体的取り組み	担当	成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ	
授業力の向上	全員が授業公開を行い、批評しあうことで、教科指導力の向上を図る。	教務	教員全体で、学校公開以外で研修目的の公開授業を実施する共通理解が得られた。	C	年度途中で目標設定のため、2学期末現在で公開授業が進んでいない。公開授業以外で指導力向上のために取り組む目標設定が必要である。	1年間に1人1回以上の公開授業ができるようにする。	公開授業は回数ではなくその中味を評価の対象にすべきである。積極的な意味でのC、厳しい自己評価である。
	大学入試問題研究を実施し、授業に反映させる。また、冊子にまとめ生徒に配布する。	進路	各教科担当者が大阪大学入試問題研究を実施し、冊子にまとめ、希望生徒に配布した。	B	授業で取り扱うには習熟度から見て難しさがあり、冊子化に係る経費に難がある。	教員の入試問題研究を旨としているので難関大学を取り扱わざるを得ない。現状を維持する。	
	生徒による授業評価を実施し、授業の改善を行う。	学力向上	全学年を通じて8割程度の生徒が授業に満足しているが、学年が下がるに従って授業の理解度にやや低さが見られる。	B	学年が上がるにつれて授業への理解度が進むが、高校初学の段階では高校の授業が難しい。	中学の授業との落差を縮めることも考えられるが、最終的な学力保障を考えて現状を維持する。	
すべての生徒の学力の向上	朝の学習や課題提出の徹底により、日々の学習習慣の定着を図る。	1年	あてはまる、おおむねあてはまるの回答が55%程度しかなく、朝の学習や課題提出の徹底がなされているとは言えない。	C	約半数の生徒が自主的な学習を行っていない。	朝の学習や課題提出についてのさらなる意識付けと学習習慣の定着に向けた指導を行う。	・おおむね適切な自己評価である。 ・朝の学習は小中学校でも行っている。集中力をつけるなど9年+3年の小中高の運動した教育の中で科学的な視点で生徒に説いてやったら、朝の学習だけに終わらず効果がある。
		2年	おおむねあてはまるの回答が70%を超えており、学習習慣の定着として効果はある。	B	30%の生徒はやらされているという意識を持っている。	取り組みは継続。内容を進路目標にそったものに工夫する。	
		3年	80%の生徒がおおむねあてはまる以上の回答をしており、ハリーポッターを読むなど、生徒の記憶に残る学習ができ、有効であった。	A	生徒の自主性を育てる視点が必要である。	学年としての統一した取り組みを継続することが大切である。	
	個人面談・補習等での学力不振者への指導や、小集団授業・ノート添削等、学力・進路に応じた個別指導を行う。	進路	学年が進むにつれて小集団授業の効果が現れている。職員室前廊下の長机が面談・個人指導に奏功している。	B	1年生では小集団授業が少なく効果が実感し難い。教員が多忙となり、個人指導の時間が取りにくい。	学校への教員配当数の増加を要求する。	
		1年	小集団授業をほとんど実施していない状態である。	B	生徒間で理解度に著しい差が始めており、クラス単位での授業が難しい科目もある。	科目によっては小集団授業を1年次から取り入れる必要がある。	
		2年	模試の結果などから徐々にその効果が表れているのではないかと。	B	3学年の中で授業の満足度が低い。成績不振者の補習をベナルティとらえている者がいる。	わかる、できることの喜びを感じる授業の工夫が必要である。	
		3年	約65%の生徒が小集団の授業効果を認めており、生徒も保護者も80%が授業に満足している。	A	会議等で不振者への指導時間が取れないことがある。	教員の多忙な状況を緩和する方策がないだろうか。	
専門科目の確実な定着を図るため、学科や学年に応じた全商主催検定試験の受験級を設定する。	商業国経	1級電卓珠算実務検定 47 / 61 (77.0%) 1級ワープロ実務検定 34 / 72 (47.2%) 1級簿記実務検定試験 49 / 90 (54.4%) 1級英語検定試験 45 / 124 (36.3%) 1級情報処理検定試験 6 / 42 (14.3%)	1級47% C 2級71% B 3級89% C	年度目標に対する授業理解を測定する目的なので三学期に実施される検定の結果が大切。8種目のうち5種目が途中の評価になっている。	技能系の検定試験は学年進行による習熟も評価の観点に入れる余地がある。通年の評価になるように結果の分析時期を遅らせる必要があると考える。		

進路実績の向上	第1志望届けを提出させると共に面談を実施する。	進路	2年下半期に担任等との面談の中で次年度受験する大学等を決定し、将来への展望を深める。	B	志望校を絞り込める生徒には好評であるが広い範囲で進路を考えなくてはならない生徒には難しさも伴う。	早い段階での志望を固めることは大切だが、届後の見直しを継続していく。	・大学合格者の項目はBとしているが、現時点では結果が出てないので昨年度の実績を入れるのもよい。 ・おおむね評価は適切である。
		2年	担任、学年団が生徒、保護者とともに進路を考えていくよいシステムである。生徒は80%、保護者は90%近くが肯定的に捉えている。	A	これまでの進路学習が浅いと迷いが大きい。今後の変更への対応が課題である。	進路学習の記録を残しておく。	
		3年	約60%の生徒が役立つと回答しており、担任との二者面談や、7月と12月の三者面談の資料として利用できた。主任面談も全員の生徒と実施できた。	A	2年生段階で、どれだけ考えさせるかが大切である。	早い段階での志望を固めることは大切だが、届後の見直しを継続していく。	
	学年は成績検討会を考查毎に行い、分析し面談等で指導に生かす。教科でも検討会を行い具体的な対策案を提出する。	進路	学年での成績検討は行えた。	C	教科がまとまったの成績検討は頻繁に行えなかった。	会議に割ける時間の確保が必要である。	
		1年	学年会議等で常に生徒に関する情報交換を行い、指導に生かすことができた。	B	生活面に関する情報交換が主になってしまった。学習面に関する更なる検討が課題である。	教科毎での検討・分析、学年会での情報交換の実施が必要である。	
		2年	成績検討および志望校検討を実施し、三者面談での指導に役立てた。	B	教科毎の分析をどのように生徒にフィードバックさせるかが課題である。	学年や教科の枠を超えて横断的な検討会の実施が必要である。	
		3年	約75%の保護者が進路情報の提供に満足しており、8月と12月の2回の成績、進路状況確認会を実施し、三者面談や生徒の指導に役立てた。	B	教科毎の検討が十分ではない。	模試のデータなどの共有と、会議の時間の確保が必要である。	
	大学合格者数に目標を設定する。 (東大5,京大10,阪大20,神戸30)	進路	3学年進路確認会等で目標設定。志望者数を確認した。	B	数値設定は行えたが、12月現在では年内推薦合格者しか報告できない。一般入試については3月下旬の報告となる。	学校関係者評価委員会の時期を調整して、合格者がある程度報告できる日程で開催する。4大学受験者数を増すように配慮する。	

重点目標:豊かな人間性を持った生徒の育成

年度努力事項と具体的取り組み		担当	自己評価(A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)				学校関係者評価
			成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ
規律ある態度の育成	「生活3原則」の徹底。特に、登校時の遅刻者数を年間0にする。	生徒指導	登校時の遅刻は、2学期終了時で0.13であり過去一番少ない状況である。限りなく0に近づいている。	A	寝坊が理由で遅刻する者が無くならない。	全校集会・学年集会等で生徒に訴え規律ある生活を確立させる必要がある。	・マナーアップ運動・挨拶運動は形の上ではできているが本来の意味でまだ不満足ということだろう。評価Cとしているが、評価はBでいいのではないか。生徒自身がその価値を知らない。地域社会との関係を教え、良くてきたと評価して、生徒に返してやるのもよい。
	部活動の活性化を推進しながらも学習との両立を図る。(文武両道)	生徒指導	全体の入部率が88.2%であり、近年では最高である。生徒は学習と部活動の両立を目指し、日々熱心に取り組んでおり、運動部・文化部ともに成果を残している。	B	半数近くの生徒が両立できていないと感じており、時間の使い方に課題がある。	部顧問・担任・教科担当の連携を今以上に密にし、文武両道を支援していく必要がある。	
		1年	学年の90%以上の生徒が部活動に所属、熱心に取り組んでいる。学習とのバランスを考えて行動する生徒の数も増えてきたが、両立ができていると考えている生徒は45%程度である。	B	学習とのバランスを考えて行動できず、学習が疎かになる生徒が依然多い。	教科だけでなく、部活動の顧問とも協働して学習指導にあたっていく必要がある。	
		2年	文化部、運動部ともに熱心に取り組みよい結果を残している。どの成績層においても部活動入部者とそうでないものの割合は変わらない。短い時間をマネジメントしながらよく取り組んでいる生徒が多い。	B	学習ができていない理由を部活動のせいにしてはいないか。	各部において、学習時間を確保できる配慮をする必要がある。	
	マナーアップ運動・全員参加の朝のあいさつ運動を実施する。	生徒指導	「マナーアップ運動(6月、11月)」・「全校生挨拶運動」とともに予定どおり実施した。	C	生徒の意識を高めるという点においては、50%に満たない状況である。	「マナーアップ運動」と「全校生挨拶運動」の問題点について分析し、あり方について再検討する。その上で学校全体での取り組みに対する意識の向上を図る。	
ボランティア体験の実施	災害ボランティア等へ参加する。	生徒指導	今年は、8月の台風で被害を受けた佐用町にボランティアとして2つの運動部が参加し、復興支援活動を行った。さらに募金活動を行い、社会貢献に努めた。	B	今年は2つの部活動の参加であったが、もう少し多くの部活動の参加が理想である。	年度当初の部長会議でボランティア意識の向上に努める。その上で、災害発生時には、生徒会を中心に広報活動を行う。	・評価はおおむね適切である。
	学校周辺の清掃活動を実施する。	生徒指導	年2回(6月、12月)のクリーンキャンペーンを神戸電鉄と連携し、予定通り実施した。2回目の時は、200名を越える参加があり、大規模かつ有意義な活動になった。	A	参加人数増加に対応できるだけの、清掃用具がない。	施設整備費で清掃用具を購入し、人数の増加に対応できるようにする。	
	様々な地域貢献事業を実施する。	総務	当初計画にあげていた事業に加えて、科学総合コースや国際経済科の出前授業、災害ボランティア活動などにも参加できた。	A	次年度も時代の変化、地域の要望と生徒の実態に合った地域貢献事業の計画を立てる必要がある。	地域貢献事業について、全職員に新しい取り組みと継続すべき取り組みの意義を伝え次年度の計画を立てる。	
人権教育の充実	携帯やネット上の人権侵害問題(いじめ等)について人権講演会やホームルームを実施する。	人権	講演会(インターネット上の人権侵害問題)は、生徒にとってタイムリーな内容で大いに参考になった。1年生は「生き方ホームルーム」を含めて、ネット上の人権問題に関して学習する機会が多く持てた。	A	講演会や研修会等の実施時期や、情報化社会と言われる今、より意識の高い人権モラルを身につけさせる方法を検討する。	講演会等を年度当初(4月か5月)に実施し、早期に諸々の人権侵害問題について啓発する。特に1年生に関しては、より一層の人権意識・感覚を早期に身につけさせる。	・評価はおおむね適切である。
	国際交流を通じ、世界には様々な価値観が存在することを認識させる。	国際理解	オーストラリアからの生徒のホームステイ受け入れが例年以上にスムーズに行えた。クラス全体で受け入れた生徒との交流が広がっていた。	A	国際交流事業のうち一つがインフルエンザの影響で中止になった。国際交流の恩恵を受ける生徒を増やしたい。	学校行事と国際交流の取り組みのバランスをとりながら交流の機会が増やせるか検討する。	
	特別支援教育等の教育相談研修会を実施する。	保健	進学校在籍する発達障害の疑われる生徒は、高い能力ゆえ表面的には適応しているように見える。研修により対象生徒に関する知識・理解が得られ、今後の指導に役立つと考えられる。	B	対象生徒への教員や周囲の生徒の適切な対応が課題である。	教員や周囲の生徒がより理解者・支援者になるような取り組みを研修する中で実施する必要がある。	

重点目標:地域に信頼される学校づくり		自己評価(A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった)				学校関係者評価
年度努力事項と具体的取り組み	担当	成果	評価	課題	改善策等	自己評価の適切さ
情報発信の手段と内容の充実	情報	本校のすばらしい体育大会を動画の形でホームページにのせることができ、かなり説得力のある情報発信になった。インフルエンザ関係の連絡時にアクセス数が多い時で4000回/1日、平均して150~200回である。多くは本校関係者である。	A	内容でレベルの高いものを目指していく必要があるが、担当者に時間と作成能力に限界がある。各部署のページを作成する。	HPの作成作業はICT支援員を活用していきたい。ビデオや写真等資料の収集方法を考える。	・評価はおおむね適切である。
	総務情報	年度途中ではあったが、新しい緊急連絡のシステムを提案し、保護者の協力を得て、正確かつ迅速な連絡に近づいた。	A	家庭の事情で携帯メール連絡網を利用できない場合があり、100%の確率で迅速な連絡ができるシステムを考える必要がある。	インターネットを活用して生徒連絡を行っている学校があるとの情報を得た。ぜひ、実情を調べ取り入れたい。	
	保健図書	例年通り「図書館報」を2回発行した。新しい取り組みとして、「図書通信」を13回発行した。新規購入図書の紹介を画像情報を主とする形式で、カラープリンターによるカラー印刷でクラス掲示しHPにも掲載した。発行日に入場者数が目に見えて増える効果があり、成果があったと判断している	A	生徒の原稿をもっと使うこと。	生徒の利用状況の数値化や次年度に向けて新しい取り組みを考える必要がある。	
	1年	PTA総会と教育懇談会において状況説明の冊子を配布した。また、学年行事に関しては、HPの学年ページを通して情報提供を行っている。	B	HPの学年ページの更なる有効利用が必要である。	学年行事に限らず、学年ページを利用して、学年情報を効果的に保護者に知らせるシステムを構築していく必要がある。	
	2年	PTA総会と教育懇談会において状況説明の冊子を配布した。クラスによっては学級通信を発行している。	B	定期的な通信の発行はできていない。	学年通信の発行とHPの学年ページの更新が必要である。	
3年	学年からはPTA総会と教育懇談会の2回、学年からの状況説明の冊子を配布した。	B	定期的な通信の発行はできていない。	学年に担当を作り、定期的な学年通信の発行ができればよいと考えている。		
教職員の意識の高揚	総務	1学期にインフルエンザ対応をテーマに危機管理ワークショップを行った。それまでに新型インフルエンザへの対応でかなり大変な面があり、全教職員をあげて熱心に対処策への協議ができ、新しい提案も出た。	A	事前資料を準備し、多方面の課題について緊張感の持てるワークショップの設定が求められる。	部・学年の壁をこえてテーマを募集し、緊張感の持てるワークショップを企画する。	・評価はおおむね適切である。 ・Xoopsの活用についてはそれほど気にしなくてもよい。FACE TO FACEも重要であるし、日記のように付けて、電子データ化しておくことも大切である。テストや教材の共有化も進めてほしい。
	学校評価	学校評価の理解を深めるため職員研修会を行い、学校評価ワークショップを開催する中で職員の学校経営参画意欲を高め、課題を整理し、学校ビジョンを明確化した。また、学校評議員会等に部主任も出席し参画意欲を高めた。(学校評議員会並びに学校関係者評価委員会年3回)(学校評価検討委員会年1回)(学校関係者評価研修会1回・学校評価教職員研修会1回・学校評価ワークショップ1回)(学校評価委員会7回)・(学校関係者評価委員授業見学会1回)	B	今年度は学校評価研究指定の一年目でもあり、大幅に学校評価シート等を見直した。一定の評価はあったが、まだ不完全な面もあり、実施する中で改良が必要である。	学校評価アンケート等を年2回以上実施し、小野高校の未来を見据える中で、学校評価研修会等を通して学校関係者や職員の意見を聞く中で、重点課題の見直しをはかり、学校評価システムを確立させたい。	
	情報	Xoopsは県下でも早くかつスムーズに導入はできた。1学年を中心に試行をお願いした。しかしアンケート結果(c)からは、4分の1程度の先生しか利用されていない。	C	今年度の試行結果から、意見を集約してより使いやすく設定する。まずスケジュールを利用価値のあるものにする。利用グループの中心となる人材を育成する必要がある。	職員から課題を聞く中で、研修を行い改善したい。無理やり利用する環境は避けたい。利用できることから利用してもらい、役に立つツールなら自然と利用者が増えてくるはずである。	

地域との連携	キャリア教育を推進するため地域の教育力を活用したインターンシップを実施する。	インターンシップ委員会	第2学年商業科・国際経済科の生徒全員が、8月に3日～5日程度、北播磨地域事業所を中心に実習を実施した。	B	3年次になると目前に大学進学や就職試験が迫り、より厳しい目でインターンシップの在り方や進路目標を考えているため2年次とは違う結果となっている。普通科生徒の参加が少ない。	2年生になるとすぐに事前学習プログラムが始まるので、1年生段階でのPRが必要である。	・インターンシップは3年の方が評価が低くなっている。2年の実施直後と3年になって進路が現実のものとなってきた時点での評価の違いであろう。 ・評価はおおむね適切である。
	保護者を講師とする職業講演会を実施する。	1年	実際に現場で働いておられる保護者の方々の「生」の声から、働くことの素晴らしさや充実感を肌で感じ、職業に対する考えを深め、進路意識を高める機会として職業講演会を実施、11名の保護者の方々と1名のOBの方に講演をして頂いた。	A	準備期間が短くなってしまい、講師の方々にご無理をお願いしてしまった感がある。	学年当初から実施期間を含め、しっかりと計画とたて、実施していく必要がある。	
	地元企業と連携し商品開発や地域の課題の調査研究活動を実施する。	商国	「商品開発」は小野商工会等公的機関と連携した「モデリングタウン小野」事業に2年生「ビジネス基礎」や3年生「課題研究」で参加、「地域活性化策」では神戸電鉄活性化策やシルキーウェイあわの里オープニング等に取り組んだ。	A	「商品開発」では、毎年安定して地元事業所の協力を得ること、「地域活性化策」では、内容の重複が見られた。	公的機関の協力を得ながら、有効な商品提案を続けたい。また、各学科の個性を発揮した課題研究の展開を構築していきたい。	

### 学校関係者評価

評価方法について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本格的な学校関係者評価は初めてであるが、よくできていると思う。次年度は、この成果をもとに前年度末から評価システムを起動させ、PDCAを機能させてほしい。</li> <li>・評価基準(到達目標)の設定は大変ではあるが、この設定プロセスが教職員の専門性が発揮され、教職員間の協働性・同僚性を高める機会にもなるので、次年度は是非、すべての評価項目について明確な到達目標を設定していただきたい。</li> <li>・年度努力事項ごとに評価基準(到達目標)が設定されているので、年度努力事項ごとの自己評価があるべきである。</li> </ul>
----------	--